
PARADE

真跡 翠音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P A R A D E

【Nコード】

N 2 4 6 2 D

【作者名】

真跡 翠音

【あらすじ】

時は2334年。国連の1機関として設立された【特定考古遺物研究管理局】―通称P A R A D Eは、表向きはU N E S C Oの1部署。しかしその真の任務は、人外の力を秘めた遺物【オーパーツ】を犯罪者から保護・奪還することだった。物語は、P A R A D E養成学校に現われた三人の天才が、卒業試験にのぞむところから始まる。【オーパーツ】と歴史に秘められた謎とは……そして、【オーパーツ】を求める犯罪組織パンゲアとは……？ 歴史・冒険・アクションが合体した小説です。

File1::reputed to be a genius(1)(前書き)

作品に登場する人物・団体等の一切は、実在の人物・団体等とまったく関係のないフィクションです。

File1..reputed to be a genius(1)

「……その時、大統領ルナンフェスが下した決断こそが、ジブラルタル盟約の基礎となり……」

教室に流れるのは、どんな名ヴァイオリニストでも奏でられない音楽のごとく、力強いアルト。

窓の外では、気のはやい蝶が、いまだ蕾の姿の花々の間を忙しなく飛び回っている。

この街にはめずらしく、今日は気温が高め。おまけに席は窓際ときている。

「……こりゃ、天国やなあ……」

小さく呟き、周囲の目も気にすることなく巨大なあくびをやってのけ、長い手を窮屈そうに机の上で折りたたみ、その上に頭を乗せようとして、

「では次、シオン、ここを読んで……な、何をやっとなるか、シオン・ヒラノ!!」

「あだっ！」

平野紫苑は、その頭に見事に先生のゲンコツを食らった。

「まったく、お前と言うヤツは……」

歴史の担当教員は、禿あがった頭まで赤く染めながら、くどくどと文句を並べ立て始める。

「もう卒業試験を控えていると言うのに、いったい何を考えておるのだ！　いつもいつも授業を聞かず居眠りばかり！　そのくせ成績はトップクラスとは……」

「せんせー異議あり！」

緩慢な動作で立ち上がると、シオンは大げさに手を振り上げた。

「俺が眠くなったんは、クランのせいでーす！」

「俺かよ！」

先程まで美しい声で教科書を読み上げていた親友を指差し、シオンはニヤリと笑う。

「クランがあんまりええ声で教科書読むから、眠くなってもたんでーす」

いつも通り、妙な なまり のある英語でしれっと恥ずかしいことを言い放つ居眠り常習犯に、先生は思わずあっけにとられてしまう。

「バカかよお前……」

クランが呆れ声をあげながら、その美貌を掌に埋めた。

「しかもせんせー、こいつも卑怯やねん！」

そんな周りの様子など一切お構いなしに、シオンは自分の後ろの席で寝息を立てるもう一人の親友を指差す。

「こいつチビだからって、でかい俺の後ろに隠れていっつも寝とるん、ほんま腹たつわぁ！」

「な……アルフ！ お前と言うやつは……」

しかし、先生がアルフの柔らかな金髪に拳をお見舞いする直前、授業終了のチャイムが盛大に鳴り響いた。

「ふあーあー……ん？ もう終わりですかあ？」

目をこすりながら上半身を起こす小柄な少年の暢気な声に、先生は禿頭を抱えた。

…to be continued

File1: reputed to be a genius (2)

「ははっ、見たかよあの先生の顔！ 傑作だなあ」

「大体お前はちゃっかりしすぎや！ いつも寝てて怒られるんは俺やし、お前席変えろやー」

「……それ以前に、授業中は寝るなよ……」

あらゆる人種の生徒達で賑わう休み時間の廊下をだらだらと歩きながら、アルフと紫苑、そしてクランは先程の様子について語っていた。

「でもあれだよなあ、俺たち寝ててもちゃんと良い成績取れるもんなあ」

「クランはええ子ちゃんすぎんねん」

「あのなあ、先生の身にもなれよ……にしても、ほんとに、もうすぐ卒業なんだよな……なんか早いな。入試がついこの前だったみたいだぜ」

「だなぁ。もう4年もたつのに」

「ほんまやな……」

親友の言葉に、紫苑はこの学校で過ごした4年間に想いを馳せる。
4年前、この道を選んだあの日に――……

「おい、これ見ろよ!」

「ん? 何やそれ?」

「PARADE……デモ更新かなんか?」

紫苑は、伝統と格式を誇る京都の大富豪・平野家に生まれた。父は日本一の剣術師範、母は京都大学教授の娘――ありあまる財産と優しい両親、そして兄二人や道場の門弟たちに囲まれて過ごす何不自由ない日々は、誰もが羨み、そして確かに幸せで楽しいものだった。

だが、紫苑はそんな日常に納まるような人間ではなかった。

齢10にしてハーバード大学の試験を完璧に解いてしまうほどの頭脳、父や兄顔負けの身体能力、そして何よりも情熱的で好奇心旺盛な心を持った少年は、世界を知りたい、と一言残し、単身旅に出た。

紫苑がまず向かったのはアメリカだった。

そしてそこで、彼は二人の人物と運命的な出会いを果たす――。

「ばか、違うよ！ PARADEは『特定考古遺物研究管理局』の略称で、国連の部局の一つだ。それより、ここ読んでみろよ！」

アメリカ先住民族・スー族の少年クラン・レッドが興奮気味に突き出すチラシを、紫苑は繁々と眺めた。

「何……『PARADE局員養成学校新生募集、人種・国籍・宗教・性別・年齢等は一切不問。必要なのは溢れる知性とありあまる身体能力、そしてやる気！ 君もおおいなる歴史の守護者にならないか?! 説明会は10月2日です』……?」

「おい、これほんとにP A R A D Eのチラシ？ 国連の1機関にしちやあずいぶんお気楽な文章だよね」

紫苑の肩ごしに白い指でチラシを弾くのは、アルフ・ブリングトン——アイルランドからやってきた、ケルトの末裔である。

「ま、まあな……でもこれが本当なら、まさに俺たちにおあつらえ、
だろ？」

切れ長の瞳を輝かせるクランの言葉に、紫苑とアルフもにやりと笑みを浮かべる。

「せやな……またとない好機やん？」

「なあなあ、説明会ってどこでやんのさ？ 食い物も出るかなあ……」

4年前の晩夏、3人の少年たちは今と同じように、笑っていた。

「で、結局出たのはコーヒーだけだったっけな」

「そうそう！　だってまさか外で説明会やるとは思わなくてさあ」

当時のことを思い出し、アルフが頬を膨らませる。

「でもまあ、俺らはここまでこれたやん。こらめっちゃ幸運なことやんなあ……」

「そうそう、すげーラッキー。だからほら、ここまでこれなかったヤツらのことを想って、あと残り少ない時間をちゃんと寝ないで過ごし……」

克蘭が話を元に戻したところで、廊下の天井から夕食を知らせるチャイムが鳴った。

「あ、メシ！　やべ、はよ行かな！」

「シオン、お前は前菜キープな！」

「お・ま・え・らあゝ!!」

「幸運」を實力で掴み取った若者たちの足音が、賑わう廊下に一際高くこだました。

: t o b e c o n t i n u e d

File1::reputed to be a genius(3)

P A R A D E——正式名称

「特定考古遺物研究管理局」はUNESCOに属する機関で、その主な職務は歴史的遺産や遺物の管理・研究である。

この説明に、確かに間違いはない……少なくとも表向きは。

だが、ルクセンブルク市中の古いホテルを改装した寮に住まい、P A R A D E局員養成学校で学ぶ者たちは全員、この機関の「真実の姿」を知っている。

国連の一機関、と謳うこの部局に就職するのに、何故専門の養成学校があるのか。

何故歴史の研究や遺産の保護のスペシャリストになるために、天才級の知識と並はずれた身体能力、何事にも動じぬ精神力を身につけなければならぬのか。

そして何故、この学校の存在を、生徒と関係者しか知らないのか――

ここにいる生徒たちはそれらすべてを知ってなお、ここで学び、P
A R A D E局員をめざす道を選んだ。

そして、それほどの心構えを持った彼らは、

「あってめっ！ 横入りはあかんて言うとりゃんけ！」

「シオン、何ぼさつとしてんだよ……ってあああ！ それは俺のス
パゲッティだってえ！」

「……毎度毎度よくやるよ、おまえらは……」

世界中のどんな学校よりもどんな軍隊よりも厳しいここでの生活を、
存分に楽しんでいた。

毎日、朝食と夕食は、寮の大ホールでバイキング形式で振る舞われ
る。

年齢・性別・国籍もさまざまな生徒達が集っているため、そのメニ
ューは他に類を見ないほど種類が豊富だし、作るのは専属の一流シ

エフばかり。これで取り合いが起こらないわけがない。

しかも紫苑たち三人は18歳、生徒の中では最年少——食べる量も半端ない。特にアルフは、小柄な体のどこにそんな余裕があるのかと言うほどの大食いだ。だから彼らはいつも、夕食のチャイムが鳴る頃には食堂の前で待機しているようにしているのだ。

「つたく……今日はあの先生のせいで出遅れちまったい！」

ひしめく人波をかきわけつつ、メインディッシュを確保し座席に向かうアルフが悪態をついたその時、

「いい加減にしろ、ブリングトン」

氷解のような声が、アルフの頭上で響いた。

「……あ、メリーさんじゃん」

「だ、誰がメリーさんだ！」

アルフは、青筋立てて怒鳴る背の高い青年を目を細めて見上げた。

「何をいい加減にしろってんだい。俺は腹一杯食いたいだけだ」

「飯の話をしているのではない！ 貴様の態度のことだ！」

碧眼をぎらつかせ、青年が言葉を続ける。

「先程の先生への態度はなんだ！ いつもいつも授業では寝てばかり、注意されても意識はうわの空、貴様は飯のことしか頭にないのか？！」

「……ふーん……でも、その飯のことしか頭にない俺に、一回も試験で勝ったことないじゃん、メリーさん」

「なっ……」

笑顔で弱いところを突かれ、青年は言葉を探しあぐねているようだ。幾度か口をぱくぱくさせたのち、今度は標的を変更する。

「お、おまけにヒラノ！ 貴様も貴様だ！！ 貴様は授業をさぼりすぎだ！ 授業にも出ず野球をして遊び！ たまに出たと思えば居眠りばかり！」

ちょうど前菜を山盛りにしたトレイを抱えて近寄ってきた紫苑が、さも意外気に眉をあげる。

「……ほおー……でも、そのさぼってばっかな俺にも、一回も試験で勝ったことないやんか、メリーさん」

「くっ……俺の名はメリーではない！ ウイル・メリランドだ何回言えばわかるのだ！ まったく、克蘭くんが貴様らのような者たちとトリオを作っているのが常々嘆かわし……」

「そこまでしておけ、ウイルス」

白い肌を紅潮させて怒り狂うウイルスの背後から、ひょうひょうとした声。

「あ、ラハンさんやん」

181cmある紫苑の身長をさらに上回るひょろりとした人影が、いつのまにかウイルスの肩に手をおいている。

ラハン・パブロー——サマルカンドの至宝との呼び声高い青年は、もう片方の手でウイルスの金髪をくしゃくしゃにしながら呑気な声を

出した。

「悪いねえ、こいつはちいっと、カルシウムが足りねえみたいだ…
…ウィル、落ち着きなさい、この天才くんたちに楯突くのはよしておけよ。ほら、トマトスープ分けてやるからよお」

「いらん!! それより、あんたはなんでいつもそうなんだ! こいつらにへり下ることなんかないだろう! まったく……そしてティアマはどこに行ったんだ!」

「あ、ティアマさんなら克蘭とあそこで語ってまーす」

アルフの指差す先に皆が目をやると、

「あ、これかわいいな! 星型になってる」

「俺は……この……花のやつを……」

絶世の美少年インディアンの隣、すらりとしたエチオピア人青年は、熱心にクッキーを選んでいる。

「……」

もう怒る気力がなくなったのか、くすくすと笑うシオン、アルフ、
ラハンに囲まれたウィルは盛大なため息をついた。

∴ to be continued

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2462d/>

PARADE

2010年10月21日20時58分発行